

『今月の天候と農作業』

通巻第5611号
1月号
平成29年12月28日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間のはじめは、気温の低い状態が続く見込みです。

【予報のポイント】

寒気の影響を受けやすく、期間のはじめは気温の低い状態が続く見込みです。また、向こう1か月の気温は低いでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	50	30	20
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、低い確率50%です。

週別の気温は、1週目は低い確率50%です。2週目は平年並または低い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 12月30日(土)～1月5日(金)

期間のはじめと終わりは気圧の谷の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日がありますが、中頃は高気圧に覆われて概ね晴れるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 1月6日(土)～1月12日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から4週目の予報> 1月13日(土)～1月26日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆早期水稲

1 種子の選別と消毒

種子は枝梗をよく取り除いた後、塩水選を行い、水で洗い流します。

種子消毒は籾袋に余裕を持たせ薬剤が袋の中心部まで十分に届くようにします。籾に気泡が付いていると防除効果が低下するため、袋を揺すり気泡をよく抜きます。薬液の水温が10℃以下では効果が劣る場合もあるため、各薬剤の水温や使用時間を遵守します。温湯消毒法の場合は、割れ籾の多い種子や一部の品種では発芽率が低下する場合もあるので、事前に確認します。

2 浸種と催芽

浸種の水量は種子籾の2倍以上とし、期間は水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度と十分に行います。水の交換は薬剤効果を安定させるため、3日目以降から行います。種子籾袋の数が多い場合は適宜、位置を入れ替え、温度や酸素が均等になるようにします。浸種が十分になると籾の胚の部分が白く見えるようになります。浸種後は、30℃～32℃で24時間、芽が1mm程度伸びた状態まで催芽します。水切りを行う際は厳寒期であるため、夜間の冷え込みで発芽障害を起こさないように注意します。

◆ムギ類

1 麦踏みと追肥

麦踏みは耐寒と耐干性を高め、分げつの増加や稈の伸びすぎを抑える効果があります。節間が伸び始める2月中旬までに2～3回実施します。霜や露がある場合や茎の水分が高い時に行うと、茎葉の損傷が大きいため、土壌や株の水分が低い乾燥した時に行います。

分げつ肥は1月中旬に窒素成分で10a当たり2.5kg程度施用し、条播きの場合は土入れします。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆共通事項

晴天日の午前中は、ハウス内の温度を十分確保し、光合成を促進させ、午後からも急激に温度を下げないように換気に注意します。夜間、暖房機の設定温度より実際の最低温度が低くなる場合があるので、翌朝冷え込みが強いと予想される場合は、暖房機の設定温度を普段より高めに設定し、実最低温度を維持します。

かん水は、地温低下を防ぐため、晴天時の午前中の早い時間帯に行い、液肥での追肥は硝酸態窒素主体のものを使います。

◆きゅうり

①摘心栽培：草勢が低下すると不良果が発生するため早めに摘果を行います。また、採光・風通しを良くするために、生長点を2～3本確保しながら、込み合った場所は黄化した葉や病気等の認められる葉を中心に整理します。追肥は、かん水時に窒素成分で月5～6 kg/10 a施用します。

②つる下ろし栽培：日照不足、低温等の影響による「心止まり」が発生しやすい時期です。生長点の状態を確認しながら、草勢が弱い場合には3節に1果程度を摘果し、着果負担を軽減します。また、過度の摘葉は草勢低下を助長するため、収穫節位から下5～6枚は葉を残しましょう。

◆ピーマン

促成栽培は、着果量が多いと草勢が低下しやすくなるので、かん水を多く、夜温を普段より高めに設定し、果実の肥大を早めます。また、追肥遅れに注意し、2月までは窒素成分で月3～4 kg/10 a施用します。

◆トマト

特に、光を必要とする作物なので、日中は内張ビニールを開け、光の確保に努めます。果実肥大、着色促進、食味向上のためには、15～18枚の葉が必要なため、過度の摘葉は避けましょう。

◆いちご

低温は、食味低下や小玉果を誘因するため、午前中は25～28℃を目安に温度管理を行い、開花から45日程度で収穫できるようにします。また、1果房当たり10果前後になるよう摘果します。

追肥は液肥主体とし、窒素成分で月2～3 kg/10 aを施用しますが、かん水、追肥ともに生育を見ながら控え気味に行います。

(黒木 正晶)

葉茎菜類及びいも類

ハウスやトンネル被覆栽培の播種期や定植期です。支柱立てやビニール被覆等、植付け準備を計画的に進め、地温を確保することでスムーズな発芽や初期生育が期待できます。

◆食用かんしょ

トンネル栽培用の育苗時期です。本ぼ植付けの60日前を目安に種芋を伏せ込みます。夜間は保温資材で被覆し、最低地温が20℃以下にならないようにします。萌芽したら日中の温度は25℃を保ちますが、30℃以上に上昇しないように換気に注意し、丈夫な苗に仕上げます。植付け約10日前から暖かい日中にはできる限り換気を行い、外気に慣らします。

◆ばれいしょ

下旬より不織布被覆栽培の植付け期です。ばれいしょは植物防疫法の指定種苗のため、植物防疫検査印のある健全な種芋を用いましょう。種芋は30g程度の大きさのものが適していますが、芋が大きい場合には芋の生長点から基部に向けて縦割りし、使用します。縦割りにより芽が順位別に均等に分かれるため本ぽでの生育が揃いやすくなります。

◆ごぼう

9～10月にかけて播種したものが収穫期に入ります。収穫開始時期の目安は、マルチ栽培は播種後130日、トンネル栽培のものは100日程度です。

◆スイートコーン

ハウス、ミニハウスは中旬から、大型トンネルは下旬から播種適期です。地温が低いと発芽率が低下するので、地温を高め、保持することが重要です。播種1週間前までにはトンネル被覆を行い、地温を確保してください。なお、ハウスやトンネルの大きさ、被覆資材の素材や厚みで温度確保の能力が異なります。温度管理が不適切な場合は、桿が伸びすぎてトンネルを除く時期より前に葉や雄穂がビニールに接触し、先端不稔等の品質低下を招くので、生育ステージに応じた保温と換気に十分注意しましょう。また、来月播種する小型トンネル栽培の準備も始めましょう。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆完熟きんかん

1月中旬から完熟きんかんの収穫が始まります。収穫は、着色や食味を確認しながら開始します。

収穫を開始したら、過熟やうるみ果を防ぐために、昼温は15℃を目安に管理します。また、裂皮を防止するために早朝の換気等により、施設内の湿度を低く維持しましょう。

完熟果実は打ち身や圧迫による傷害を受けやすいため、果実の過度な積み重ねを避ける等、丁寧に扱きましょう。

◆マンゴー

出蕾後に急に温度を上げると花芽の減少や結果不良となり、ミニマンゴーになる等の影響が懸念されます。花芽の発生状況を確認しながらじっくりと温度を上げ、充実した花を確保しましょう。

開花期に湿度が高くと、花穂の軸腐病や灰色カビ病が発生し、その後の果実品質が低下し

ます。換気や夜間の十分な加温により、湿度を低く保ちましょう。花穂が伸びてきたら、ひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイントです。加温用のダクトを使用し、病気の発生を抑制する方法もあります。最寄りの農業改良普及センターやJ Aに相談してください。

また、満開期のホウ素剤の散布、幼果期のカルシウム剤の散布により、果実の生理障害を防止します。

2 落葉果樹

◆基肥の施用

落葉果樹は、柑橘類等の常緑果樹と違い、根の活動が始まるのが2月上旬頃と早い傾向にあります。このため、なし、くり、かき等には出来るだけ早く施肥を行いましょう。

3 果樹全般

◆有機質の投入と土壌改良

果樹栽培において、高品質、高収量を達成するためには土壌の通気性の確保が重要です。完熟堆肥や稲ワラなどの有機物を施用し、土壌の通気性の改善を行いましょう。

土の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害し、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、必要に応じて石灰質資材で調整しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆電照ギク

1～2月に消灯する作型は花芽分化時期が1年中で最も低温期になるため、夜温を十分に確保できるよう暖房機の設定温度や停電・事故等には十分注意してください。電照期間中に低温に遭遇した場合は消灯1～2週間前から夜温15℃で予備加温を行ってください。低温開花性系統の場合、消灯後は18時～翌1時までは15℃、1時以降は12℃の変温管理を行うと大幅に開花が遅れず、暖房コストの削減が可能です。また、再電照時期は必ず検鏡してから決定してください。低温期はハウス内の湿度も高まりやすいため、白さび病が多発します。十分な換気を行うとともに、各種防除法を組み合わせ、予防を徹底します。

◆スイートピー

1月は比較的安定した気象で草勢も安定している状況です。天気予報を確認しながら品種特性を考慮し、気象条件に合わせた草勢コントロールを行いましょう。

全天日射量は12月下旬から増えます。かん水が遅れると2月以降の草勢低下を招くため、天候と草勢を見ながらかん水量を徐々に増やします。

地温の低下するこの時期に窒素肥料を追肥する場合は、硝酸態窒素主体の液肥が効果的です。また、余分な芽や葉を取り除き、曇天時の落蕾を軽減しましょう。

◆デルフィニウム

沿海地域のエラータム系は二番花以降の花穂が急速に抽だい・伸長するので、十分に採光し、カルシウム剤を施用して、硬さとボリュームを確保します。

◆ホオズキ

早い産地では下旬から植付けが始まります。土壌消毒は事前にビニールフィルム等でべたがけを行い、地温を上げた上で実施します。また、健全な地下茎を使用し、本ぼへの病気等の持ち込みを防ぎます。

◆ラナンキュラス

日中は採光のため内ビニールの開閉を着実に行いましょう。日中は10℃を下回るような極端な低温管理ではなく、生育適温での管理を行います。収穫が続くと草勢が低下しやすくなるため、定期的に液肥を施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を行います。

(中村 広)

畜 産

◆家畜防疫対策

11月以降、島根県において7件の野鳥から高病原性鳥インフルエンザウイルス（H5N6亜型）が検出されています。

野鳥はウイルスを持っているという意識を持ち、農場にウイルスを侵入させないよう飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。具体的には鶏舎内や鶏舎周囲の石灰消毒と防鳥ネットの再点検を早急に行い、ハトやスズメなどの野鳥の鶏舎への侵入を防止するとともにネズミなどの小動物が鶏舎内へ侵入しないよう対策を徹底しましょう。

豚ではPEDの再発生が確認されています。手洗いや消毒の徹底とともに豚舎の作業動線の見直しや出荷車両の処理場及び農場での水洗消毒の徹底を行いましょう。

◆家畜

今月は年間で最も寒く乾燥する時期であると同時に舎内温度を維持するために、畜舎を閉め切ることから、舎内が換気不足になりやすい時期でもあります。気温が上がる昼間は畜舎カーテンを開け、換気扇やファンをゆっくりと回すなど換気を十分に行いましょう。また、乾燥すると埃や塵が呼吸器病の原因となるため、細霧の噴霧等で湿度を適度に保ち、舎内が乾燥しすぎないようにしましょう。哺乳子牛等の幼畜においては、隙間風や床の湿りが肺炎

等の病気の原因になるため、保温箱やコンパネによる風よけの設置とともに、赤外線ヒーター等の保温器具を使用しましょう。また、子牛の寝床は、常に綺麗で乾燥した状態にし、コンクリートが露出しないようオガクズなどを厚めに敷き、子牛のお腹が冷えるのを防ぎます。
(三角 久志)

工芸作物

◆茶

1 寒さ対策

寒風や急激な低温により、幼木園や中切り園では、成葉の寒害や幹割れ（裂傷型凍害）等の発生が懸念されます。被害を受けやすい茶園では防風ネットの設置等による対策を行います。また、山間地で積雪による枝折れや裂傷が発生した際は融雪を待って事後対策を行います。

2 定植ほ場の植付け準備

降雨の少ない今月は、定植の準備を行う最終時期です。

茶は定植後摘採するまで4～5年かかり、一度植付けると植替えが難しい作物です。新植に当たっては地域の微気象や茶樹特性を理解した上で、品種やほ場を選定しましょう。

茶樹は湿害に弱いため、茶園の土壌は排水が良く、耕土の深いことが求められます。地下水位が高く、湧水が懸念されるほ場への定植は極力避けましょう。

粘質土壌で水はけが悪いほ場や水が流入するようなほ場は事前の対策が必要です。深耕による混層や明渠・暗渠等の対策を行います。

また、アルカリ性土壌や改植茶園では土壌pHの調整や堆肥施用による地力増強を図ります。更に、土壌線虫被害が懸念されるほ場では、早めの土壌消毒を心掛けましょう。

(黒木 清人)

◆しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌作業は玉切り後、できるだけ早めに行い、植菌後の原木は菌糸の活着を促進するため「仮伏せ」を行います。原木を地際から40cm以下の高さに横積みし、笠木や遮光ネット等で被覆して保温と保湿を図りましょう。

2 寒子づくり

寒子は厳寒期に採取される1年のうちで最も品質の良いしいたけです。肉厚のしいたけ生産が可能ですが、防風垣の設置等、ほだ場の湿度の保持や袋かけまたは、ビニール被覆による保温・保湿に努め、しいたけの生長を促す必要があります。

また、散水を行う場合は、採取予定日の1週間前には止めて、日和子での採取を心がけるとともに、しいたけが凍結しないよう散水時間等にも注意しましょう。

3 採取

発生したしいたけは、目標とする品柄に応じ、若干早めに採取しましょう。

(永野 学)

◆たばこ

平成30年作は基本耕作技術を適期に確実に実行し、気象に左右されにくい「力強い葉たばこ」づくりを目指し、収量・品質の安定確保に向けて取り組みましょう。当面は「早作で根張りのよい充実した作柄」を作るために以下の作業を行います。

1 前作物等の関係で、たばこ予定ほ地の準備が遅れないよう、計画的な本畑準備作業を行いましょう。

2 肥料設計は土壤検定結果及び前作物調査を参考にして行いましょう。

3 堆肥は良質完熟堆肥を施用し、すじまき散布を行いましょう。

また、大柄晩作化、グレー葉生出防止のためにも未熟堆肥投入は避けましょう。

4 ねり畦防止のため、施肥畦立は土壤水分が60%程度（土を手で握って広げ、できた塊を指で押した時2～3個に割れる状態）を目安に移植1ヶ月前までに実施しましょう。また、併せて水田、畑を問わず、ほ地周囲や枕地に排水溝を完備しましょう。

5 肥土消毒や土壤消毒を行う際は、農薬使用基準に沿って実施しましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

1月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前・事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害全般	—	コスト低減のため、夜温を低めに管理したりハウスを多重・多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病 菌核病 つる枯病	並 少 やや少 並 並	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は高温、多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナキイロアザミウマ	昨年、一昨年より少ない 少	感染株を確認した場合は、速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合は、後作きゅうりの定植後直ちに予防散布し感染を防ぎます。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 菌核病 黒枯病	並 並 並 並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので予防に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底します。 また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します。
	ミナキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ	少 やや多	この時期は卵・幼虫・蛹・成虫が混在しており、卵と蛹には防除効果が低いので、最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときはさらに追加防除を行います。
冬春トマト	葉かび病 ※ 灰色かび病 うどんこ病 すすかび病	やや多 やや多 並 並	葉かび病と灰色かび病の発生が例年より早く見られます。灰色かび病は、例年1月からの発生が多くなる傾向があるため、低温多湿にならないよう日中の換気、夜間の保温に努めます。 また、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努めます。 トマト黄化葉巻病の発病株は必ず株全体を除去し、土中に埋めるかビニール袋に入れて枯れるまで密閉します。
	カコナジラミ類	並	
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病	並 並	多発すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおきます。
	ハダニ類※※ アブラムシ類※	やや多 多	ハダニ類は寄生数が増加してからの防除は難しくなるので低密度時に防除を徹底します。 また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。 アブラムシが例年より多く見られます。果実への寄生が見られる前に防除を徹底します。

- 1) ※は防除情報、※※は注意報を発表しています。
 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

